

日本の青少年育成の理解： 私たちの使命とその影響



私たちの使命

**ドリームフォーキッズ
ジャパンの使命は、困難な状況下にある子どもたちが、
自信や自尊心を取り戻し、
努力をすれば夢は必ず叶うと
信じていることができるように支
援することです。**



ドリームフォーキッズジャパン（旧タッチストーンドリームフォーキッズ）は、2011年の活動開始以来、様々な事情により困難な状況下におかれた子どもたちが、分け隔てなく普通の生活を営むための支援を行うことを目的として活動を続けています。設立以来、ドリームフォーキッズジャパンは、日本の若者たちの多様化するニーズに応えるために、活動の幅を着実に広げてきました。

青少年育成プログラムは、若者一人ひとりの成長だけでなく、地域社会の発展に不可欠なものであります。教育、スポーツ、芸術、リーダーシップ、健康、社会参加など、さまざまな分野で行われるこれらのプログラムは、若者が発達の重要な段階を乗り越え、自立した大人として社会に貢献できるよう導く役割を果たしています。

私たちが支えている人たち

→ 日本の若者たち

世界において、若者は希望ある未来を担う存在ですが、自分ではどうすることもできない状況によって、その可能性を十分に発揮できない場合があります。

日本においても、若者は貧困や差別、虐待やネグレクト、教育を受ける権利の保障といった、さまざまな課題を抱えています。

ドリームフォーキッズジャパンは、地域社会における子どもや家族の生活に実際の変化をもたらすコミュニティ型プロジェクトを支援することで、こうした課題の一部を軽減する取り組みを行っています。

→ コミュニティ型プロジェクト

コミュニティピースビルディングとは、地域住民が主体となって問題を見つけて解決策を考え関係性を再構築することで平和を促進する草の根のアプローチです。

この手法は、対立の原因に向き合い、対話を進めながら、地域に合った形で社会のつながりを強めることを大切にしています。

ドリームフォーキッズジャパンは設立以来地域レベルで子どもたちに最も大きな影響をもたらすと考えられるコミュニティピースビルディング型の取り組みを特定し支援してきました。

青少年が直面している課題

生活困窮

世界有数の経済大国である日本ですが、相対的貧困率は15%と、先進国としては高い水準にあります。

子どもに関しては特に深刻で、日本の子どもの約6人に1人が相対的貧困状態にあると推計されています。

この問題に対する社会的な偏見や認識不足により、子どもたちへの十分な支援や資源が確保されていません。

虐待・ネグレクト

過去10年間、日本における児童虐待の件数は増加し続けており、全国の児童相談所では2023年度に過去最多の虐待相談件数を記録しました。

日本における児童虐待には、ネグレクト（育児放棄）、身体的虐待、心理的虐待（家庭内暴力の目撃を含む）、そして養育者による性的虐待が含まれます。

相対的貧困とは、個人や世帯の所得や資源が社会の平均や中央値に比べて著しく少なく、通常的生活水準を維持することが難しい状態を指し、そのような状況で暮らす子どもたちは不平等や社会的排除などさまざまな障壁に直面しています。

差別

人種、性別、障がいに関する差別は、日本の若者を含む多くの人々に影響を及ぼしています。子どもたちが差別を経験する一因として、違いを適切に認識・表現する方法についての知識や教育が十分でないことが挙げられます。性別に関しては、社会的な性別役割の認識が、男女双方の機会に影響を与えています。また、外国籍の親を持つ子どもは、異なることによる偏見や排除を経験することがあり、これが友人関係の慎重さやいじめの発生、他者の多様性や尊重に関する教育の不足につながる場合があります。

障がいに対する理解は、若者向けの教育において十分とは言えません。精神的・身体的な障がいについてオープンに話す機会が少ないことが、特別な支援を必要とする人々への十分なサポートの提供に影響を与えることがあります。

教育を受ける権利

学校教育の中で、子どもたちは高い学業成績を求められるプレッシャーにさらされることがあります。これは、学業で優れた成果を上げた子どもが評価される一方で、追加の支援を必要とする子どもには十分なリソースやサポートが必ずしも提供されないため、メンタルヘルスや自己肯定感に影響を与えることがあります。

子ども向け支援体制

01

政府による支援

政府は経済的に困難な家庭への支援を行っていますが、虐待やネグレクト、親の事情などにより、養育施設に依存する子どもが多く存在します。

子どもを受け入れる主な施設には、児童養護施設と里親制度があります。2022年のデータによると、実の親と暮らしていない子どものうち、約**22.8%**が**里親**のもとで暮らし、**77.2%**が**児童養護施設**で生活しています。

日本全国の児童養護施設では、施設ごとに環境やケアの質に大きな差があります。一般的に、子どもたちを育むスタッフの人数は少なく、関わりも限られているため、子どもが必要とする十分なケアを受けられない場合があります。日本には**600以上**の代替養育施設があり、約**4万人**の子どもたちがこうした施設で暮らしています。



図はNPO法人ミライの森より改編

自立への道とこれからの困難

日本の児童養護施設で育った子どもたちは、成人後も長く続く社会的、心理的、そして経済的な課題に直面します。長年の不安定な環境は、低い自己肯定感、コミュニケーション能力の不足、優柔不断、失敗への恐怖、他者を信頼することの難しさなど、長期的な影響を及ぼします。

18歳になると施設を出て自立しなければならず、ほとんど準備や支援がないまま、生活費の管理や仕事、住居の確保を速やかに行う必要があります。

日本では高校卒業者の約60%が大学に進学しますが、施設卒業者ではわずか20%にとどまります。

この急な環境の変化とセーフティネットの不足により、失業、孤立、搾取、あるいはホームレスになるケースも少なくありません。制度的な保障が十分でないため、多くの若者が安定した自立生活を築く上で大きな障壁に直面し続けています。

02

非政府による支援

NPO（非営利団体）

日本のNPOは、青少年の多様なニーズに対応する活動を行っています。プログラムでは、子どもたちのメンタルヘルス、教育、社会参加を支援するとともに、児童養護施設での課題にも取り組んでいます。NPOは、権利擁護、コミュニティづくり、パートナーシップや協働を通じて、政府のケア制度の隙間を補っています。日本のNPOの90%は国内の資金（個人寄付や財団）からの支援を受けており、63%は政府からの助成金も受けています。

民間企業

日本の企業は、非営利分野の資金提供者として積極的に関わっています。しかし、社会的サービスへの企業からの資金提供にはさらなる改善の余地があり、企業の社会的責任（CSR）への取り組みが高まっています。2024年の企業寄付のデータは限定的ですが、日本全体の傾向として、CSR活動、戦略的パートナーシップ、インパクト投資を介して、非営利分野への関与が増加しています。

市民・個人

個人や関心を持つ市民は、非営利団体の基盤を支えています。多くの団体や福祉プログラムは、ボランティアや個人寄付者からの支援にほぼ完全に依存しています。

私たちのアプローチと方法



コミュニティベースの 理念

私たちの青少年育成における地域密着の理念は、支援の取り組みを設計・運営する際に地域の主体性を確保することを目指すアプローチです。

「プログラムを設計し、紛争を評価する際に地域の知識を十分に考慮し、地域の関係者が意義ある形で参加できるよう努める」

（Connolly & Powers 2018）ことを重視しています。

インフラの種類の選定から評価の枠組みに至るまで、プロジェクトはコミュニティによって運営されます。これは、従来の開発アプローチのように、実施機関や国際機関、非政府組織が主導して進めるケースとは異なります。

プログラム

ドリームフォーキッズジャパンは、日本各地の子どもたちを支援するために、さまざまな活動に取り組んでいます。

自立支援

体験支援

世田谷音楽療法

障がい児支援サービス

代替ケアパートナーシップ

放課後ケア

奨学金プログラム



私たちが支援するプログラムについてもっと知る。

- **自立支援** 若者が自立生活へ移行する際に直面するさまざまな課題を軽減するために、私たちは若者一人ひとりの状況に応じて、就労支援・住居支援・経済的支援を提供しています。
- **代替ケアパートナーシップ** 横浜の児童養護施設で活動するボランティアは、子どもたちに毎月のヘアカットやヘアセットを提供するだけでなく、磁器絵付けや料理教室などの体験学習の機会もサポートしています。
- **放課後ケア** 地元のベーカリーと提携し、ドリームフォーキッズは里親家庭の子どもたちが実践的なスキルを学びながら、自分たちの成果を楽しめる継続的なプログラムを支援しています。また、池袋の地元団体と連携して、家庭向けの放課後ケアプログラムもサポートしています。
- **障がい児支援サービス** 他のNPOと連携し、医療的課題や身体的障がいを持つ日本の子どもたちの自立支援を目的として、資金提供やサポートを行っています。
- **世田谷音楽療法** ドリームフォーキッズジャパンは、「自分たちの歌を取り戻そう！」をテーマに、子どもや若者を対象とした心温まる音楽の集いを支援しました。コンサートでは、活気あるバンド演奏や打楽器アンサンブル、手話でのコミュニケーションなど、多彩で魅力的な体験が提供されました。
- **体験支援** 他のNPOと協力して、福島で災害で影響を受けた子どもたちを2週間のサマーキャンプに送り、温かい心のこもったサポートと感情面での支援を提供しています。
- **奨学金プログラム** 今年度、当団体は新しい奨学金プログラムを通じて、支援を必要とする若者の教育を受ける権利を拡大するための取り組みを開始しました。

貴重なパートナー兼ボランティア、D-カラーのユキ様

- **なぜこのボランティア活動に参加しようと思ったのですか？**
ボランティアを始めたきっかけは、15年ぐらい前に、施設を立ち上げた賣間さんと知り合ったことです。ウルマさんにお話を伺って、興味を持ちました。
- **孤児院での子どもたちとの交流で、特に印象に残っているエピソードはありますか？**
ボランティアでヘアカットに行くと、約束の時間はみんな違うのに、みんなやるのがなかったり、お金がなかったりするからか、早い時間から私を待っていてくれるんです。子供達との交流の中で、まるで自分がお姉さんのように感じられて、とても嬉しく感じました。
- **月に一度訪問する中で、子どもたちの様子にどんな変化を感じていますか？**
家族との交流がとても少なく、家族との関係がとても希薄な印象があります。そのことから、子どもたちは、自分が経験したことや受けた心の傷をうまく言葉にできない様子が見られます。
18歳になって施設や家庭を出るときにも、その影響で人とのコミュニケーション自体が難しくなり、内向的で閉じこもりがちになってしまいます。
- **日本の児童養護施設や里親制度について、現場で感じる課題は何ですか？**
スタッフの皆さんはとても優しいと思いますが、スタッフ間の子供達とのコミュニケーションがなかなか取れていない現状があります。
スタッフの入れ替え時に、子供達が不安を感じる様子も見受けられます。しかし、残念ながら、スタッフを補充したり、サポートを充実させることが難しい状況にあります。

- 子どもたちが直面している最も深刻なニーズや困難は何だと感じますか？
 子供達のためのアクティビティを充実させていきたいと思いますが、スタッフの入れ替わりが多いため、そうしたイベントを企画・実施するのが難しくなっています。
- この活動を通じて、ご自身にどのような変化や学びがありましたか？
 子どもたちと関わることで、自分が与えられなかったものを補いたいという気持ちが強くなり、もっと力になりたいと思うようになった。自分が病気になっても続けたいし、七五三や成人式などの行事でも手伝いたい。



将来に向けた戦略と持続可能な成果

ステークホルダーの関与拡大

児童福祉制度の改善を妨げる主な要因のひとつは、この問題に対する認識不足と社会的議論の欠如です。ボランティア、運営者、関心を持つ市民のいずれも、この問題について語られない文化の課題を指摘しています。

ドリームフォーキッズジャパンは、青少年や家族支援の重要性について関係者の理解を深める機会を持つことで、社会全体の認識を高めることができます。これにより問題に対する緊急性が共有され、人々が寄付、ボランティア、教育活動などを通じて行動を起こすきっかけをつくることができます。

企業パートナーシップの強化と 業界専門家との協働拡大

主に従業員寄付を通じて、ドリームフォーキッズジャパン（DFK）は長期的かつ忠実な支援者を獲得してきました。

そのため、DFKが日本の子どもたちのニーズに対応する主要な戦略として、企業とのパートナーシップに注力することには大きな利点があります。

DFKが地域レベルを中心に、他のNPOと協働・支援する取り組みを継続し、さらに拡大することは、支援を必要とする子どもたちに確実な影響を与えるための重要な方法のひとつです。

組織構造の概要

ドリームフォーキッズジャパン 理事会

賣間 正人 創立者・理事長

廣崎 利洋

平岩 正史

小野 良明

人事

森田 久美子

関根 友美

連絡先情報

メールアドレス:

info@dreamforkids.jp

電話番号:

03-5575-6770

